「熊川治郎左衛門」を追って

久保田昌希

はじめに――「熊川治郎左衛門」伝承の紹介――

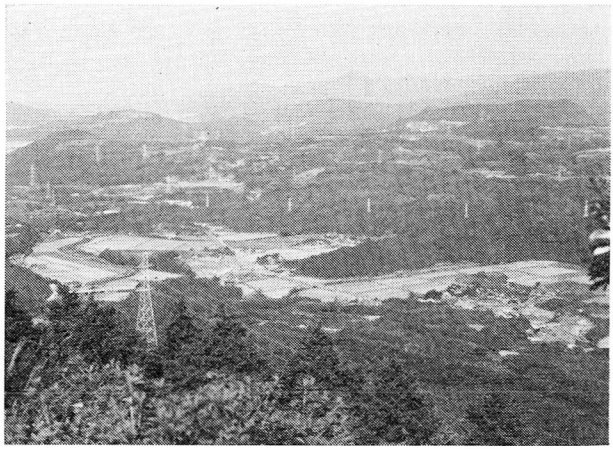
今から約七〇〇年前、鎌倉時代後半に市内熊川出身の「熊川治郎左衛門」なる人物が、肥前国伊万里付近に赴き、その地で人々に深く慕われたという伝承を、はじめて紹介されたのは市内在住の郷土史家立川愛雄氏である。

一九八四年（昭和五九）五月に刊行された『多摩郷土研究』第五八号（多摩郷土研究の会）に掲載された「防人隊長熊川治郎衛門物語り」がそれであるが、そのなかで立川氏はつぎのようにまとめられた。以下、その伝承を氏の論稿によって紹介してみよう。

「鎌倉時代の昔、現代の福生市熊川出身で、佐賀県伊万里の地に赴任した、防人隊長の熊川治郎左衛門がいた。彼が恩給田を現地の村に寄贈して、貧しい村人を助けたことが現在まで村の伝承として語り継がれ、毎年、翁の命日の旧暦三月十日が村の例祭日となっている。そして、明治三年九月、庶民が姓を称することが許されるや、翁の恩を忘れないようにと、村人の半数が〝熊川の姓〟を名乗り、現在に至っている。ということが、同地区（伊万里市南波多町水留）出身の学生、熊川邦博さんによって齎らされた。

熊川さんは、酪農学を専攻し、農業史の課題テーマ「自らの家系史」を調べるため、福生市の郷土資料室を訪れたことから判った。

福生市は、来るべき〝市制二十周年（昭和六十五年）〟を目途に、市史編さん事業に着手したのであるが、このことは、在地の文献資料の乏しい中世史にとって、貴重なほほえましい朗報というべきではなかろうか。



大野岳よりみた水留の集落

去る五月、私は九州地区での旧知の会合に出席の帰途現地を訪れ、郷土史家熊川武勇氏（七八）の案内を乞い、熊川治郎左衛門ゆかりの跡を巡り、若宮神社や、墓碑に詣でた。

信ぴょう性のある古文書などはないのだが『歴史家たちがどんな判定をしても、私の郷土の者は、治郎左衛門翁が防人廃止に伴い、恩給田を寄贈して貧しい村人を助けた物語は、先祖同様今もこれを信じて、翁の逝去日を例祭日と定め、感謝の祭りを続けています。』と。また、『翁逝いて、七八百年を経た今日、生れ故郷の方々が墓参に見えられて、私共村民一同感謝に耐えません。翁もまた、地下で大変喜んでおられることと思います。』と丁重な謝辞をうけた。」

以上が、氏の論稿の「まえがき」であるが、さらに氏は伝承として、「熊川治郎左衛門」は元寇の後、永仁二年（一二九四）、幕府による筑前・肥前などへの烽火の設置にともない、その一つである伊万里の大野岳へ赴任し、辞して後は大野岳の麓に隠棲し、その地が「治郎林」とよばれていること。また山腹には「望郷石」とよばれる自然石があること。さらに遺品として「法螺貝」が伝えられていること。などを、さきの論稿で紹介されている。まことに興味ある伝承である。

文献史料の少ない福生市の中世史を、今後まとめていくうえで、これが事実なら立川氏のいわれるように、まさしく朗報であり、それがゆえに、わたくしもさきの『みずくらいど』第一号所収の「座談会『町史から市史へ』」のなかで、この「熊川治郎左衛門」の問題を、もう少し着実に裏付けられるような形で理解したいとの旨を述べたのである。

「熊川治郎左衛門」伝承の調査概要

はたして「熊川治郎左衛門」の伝承が語りつがれている地域の歴史と、福生市の歴史とは、どこかで重複している

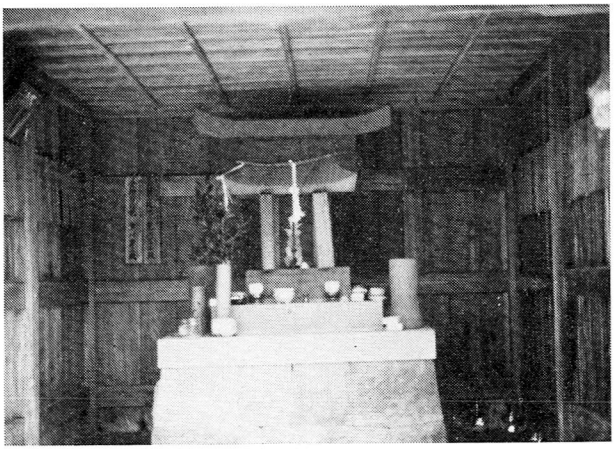
のであろうか。この点はその結果如何にかかわらず、市史編さんの過程でどうしても明らかにしておかなければならない問題であり、とくに中世史部会での一つの課題であって、中世史関係の資料集の編さん期間が着々と過ぎていくなかで、現地調査の実施が期待されるゆえんであった。

その期待通り、昨年（昭和六〇）一〇月、わたくしは市史編さん調査の一環として「熊川治郎左衛門」に関する調査実施の機会をえた。その経過はつぎのようなものである。

一〇月二二日、市史調査員小松寿治氏と佐賀市内より有田を経由して伊万里へ。同駅より市役所へ行き、伊万里市教育委員会社会教育課文化係の盛峰雄文化財専門員の案内を得、市内南波多町水留（つづみ）の熊川武勇氏を訪ね、聞きとり調査を行なう。のち武勇氏と熊川重太郎氏（水留）、南波多町公民館山崎氏に案内を頂き、「熊川治郎左衛門」に関する史跡（熊川治郎左衛門墓、熊川・若宮社、治郎林、大野岳頂上）を実踏調査。翌二三日、佐賀県立図書館（佐賀市城内）で文献調査を実施。

以上であるが、つぎに調査地および調査箇所につき略述しておきたい。

伊万里市南波多町水留　南波多町は現在伊万里市に属している。伊万里市の北東域にあたり、東松浦郡北波多村と境を接している。もとは西松浦郡南波多村であり、明治二二年旧一三村により成立した村であったが、昭和二九年に他二町六村と合併、伊万里市の一部となった（『角川



若宮神社の石祠

地名大辞典（佐賀県）』）。

南波多町は、いわゆる南波多盆地のうちの井手野を中心とするが、同盆地には南北に波多川（徳須恵川）が貫流している。この盆地の北域、すなわち波多川が蛇行しながら北流し狭隘部にさしかかる手前が水留で、「熊川治郎左衛門」の伝承はこの水留に伝わるが、水留は江戸時代には水留村といい、慶長国絵図には「津々見村」とみえており、したがって近世初期には成立していたと考えられる。水留は波多川が洪水の際、湖水化するところから付けられた地名とされ（『伊万里市史』）、水留村の成立が近世初期であることを考えあわせるとき、それ以前の中世においては波多川により、かなりの被害をうけた地域と考えてよいであろう。したがって水留村の成立は地域の人々による水との闘いの結果、齎されたものだったことは想像しえるところである。

大野岳　南波多町にある山で前平山ともいう。水留の西南にあたる。標高四二四メートル、二五〇メートルより高い部分は玄武岩に覆われている。柳田国男の「木思石語」に鎮西八郎為朝の大蛇退治伝説に関する山としてみえている（『定本柳田国男集』五）。また地理的、地形的条件の有効性から、古代において防人の駐屯地として重要な役割を果したという（『角川地名辞典（佐賀）』）。大野岳には峰の中央やや北側に烽火場が設けられていたといわれ、以前は直径一五メートルほどの円形の窪みがあり、土が真黒に焦て火を焚いた跡が明確であったが、昭和五〇年頃開墾され、今は畑となってしまっているという（熊川武勇氏談）。

熊川治郎左衛門墓と熊川若宮社　水留村の鎮守として祀られている若宮社の境内にあり、墓碑はいつ頃つくられたものかは不明。墓碑には「熊川治郎左衛門」と刻字されている。墓碑は村内の唯法寺（真宗大谷派）にあったが、この地に移されたという。

なお若宮社の石祠には、微かに「熊川若宮社」の文字が読め、また裏には「嘉永元年戊申十二月造立」とあり、さ

らに台部には願主一三人の名が刻まれている。この点から考えて、嘉永元年（一八四八）にこの地に合祀されたものと考えられるが、熊川武勇氏によれば、若宮社は「熊川治郎左衛門」が崇拝していたとされ、また合祀されたという「熊川」とは「熊川治郎左衛門」をさすもののようである（同氏より頂戴した「メモ」から）。

治郎林　「熊川治郎左衛門」が隠棲したと伝えられる地で、水留の天神社の南に位置する。ここで「治郎左衛門」は没したという。

法螺貝　「若宮社、宝物」と書かれた木箱に納められており、「熊川治郎左衛門」愛用のものであるという（ただしこれは近くにある修験の山として名高い黒髪山との関連で理解するべきであろう）。

その他　「熊川治郎左衛門」が故郷を偲んだという「治郎石」とよばれる石が、大野岳山腹にあるという。

「熊川治郎左衛門」伝承への疑問と史実への推測

さて、「熊川治郎左衛門」の伝承は、一体どこまでが真実なのであろうか。当然のことながら、わたくし自身いくつかの疑問を最初から抱いていた。「熊川治郎左衛門」は鎌倉時代の防人なのかどうか。また「治郎左衛門」を武士とすれば、武士にとって一所懸命の土地たる「恩給田」を人々に寄進するものかどうか。寄進したとすれば「治郎左衛門」の家族・一族はどうしたのか等々。そして、前述の疑問はともかく、そもそも史料の全くないこの伝承を、どのように理解したらよいのか。大いに悩まされるところである。もちろん史実は一つであり、その結果を明確に示すことは全く不可能といわざるをえない。しかし、この調査によって気付いた点を史実への推測として、以下まとめてみることにしたい。

まず「熊川治郎左衛門」なる人物は、一体いつ頃の人かという問題である。さきに紹介した立川氏の論稿によれば、鎌倉後期ということになろうが、熊川武勇氏に頂戴した「メモ」には奈良～平安初期、すなわち律令期ということになっている。この相違点は立川氏の伝承への誤認か、でなければ伝承の不統一ということになろう。

また「熊川治郎左衛門」が防人であったとすれば律令期のことになるが、律令期に「熊川治郎左衛門」という名でよばれていた人物がいたとも考えられない。こうした点から考えるならば、水留に残るこの伝承は、その歴史的経過とともにいくつかの伝承が複合的に合わさった結果と考えざるをえない。わたくしはこうした分野に関し全く無知であり、専門の方々からすれば一笑に付されるかも知れないが、恐れずに考えをまとめてみたい。

そこで結論からいえば、わたくしは「防人」と「熊川治郎左衛門」の二つの伝承が一つに重なったことによって、

このような伝承ができたと推測する。こうした結論を出した理由の一つには水留の地形的問題がある。というのは、さきに述べたように水留は近世以前は水害に悩まされた地域であったと考えられ、したがって水留村の成立も慶長期以降であったと推測されるが、一方「熊川治郎左衛門」は防人辞任後に村人に恩給田を寄進し、湧水池のほとりに住み、村人にとっての恩人であるという（熊川氏の「メモ」）。

この伝承の部分は村の開発と治水に絡んだものと思えてならない。おそらく「熊川治郎左衛門」が水留村の開発もしくは治水と大いに関係しているのではないだろうか。すなわち、防人の烽火台が大野岳にあったとされているが、防人と烽火台は結びついても、そこに「熊川治郎左衛門」なる人物が結びつくのは、伝承上の時期的問題を考えてもかなり奇異に思われる。最もこうした異なった伝承が結びつくところに伝承たる所以があるのであろう。わたくしが「防人」と「熊川治郎左衛門」の伝承は別のものであったのではないかと考えたのは以上の理由による。

すなわち、「熊川治郎左衛門」は水留村の開発と治水に功のあった人物、おそらく水留村をそれまでの波多川の水害から守る開発と治水を指導した人物ではなかったか。村人が「熊川治郎左衛門」から恩給地（土地）を寄進されたということは、水留の開発と治水という状況を示しきおり、それが前述の伝承となったものと考えられるのではないかとすれば、この伝承は「村のおこり」に関するものであろうか。

では「熊川治郎左衛門」とはどのような人物であったろうか。その点についてもこれまでの推測から、近世初期の人物であったと思われるが不明である。ただその手掛をさきの熊川若宮社にもとめてみるならば、熊川若宮社は嘉永元年一二月に合祀されたと考えられ、この「熊川」とは「治郎左衛門」と伝承されているので、近世後期にこの伝承が成立していたとは確実であるが、この「熊川」をたんに「治郎左衛門」の姓と考えるのみでなく、地名と考えるとすればどうなるのであろうか。そこでその一つとして福生市熊川が考えられる訳であるが、近世の初頭に福生からはるばると水留に赴くことは理由もなく、まず考えられないし、そうした人物の存在も考えられない。この点から、あきらかに福生市熊川と「熊川治郎左衛門」伝承との関わりは残念ながら切り離されてしまう。また佐賀県佐賀郡富士町に上熊川という大字があり、これは「くまのがわ」と読むようで、ここには神代（くましろ）氏の居城熊ノ川城があって戦国末期の永禄年間に竜造寺氏が攻めたという。この辺出身の人物であろうか。

もう一つ考えられるのは、「熊川」が海を隔てた朝鮮半島の「熊川」（慶尚南道鎮海市）すなわち「ウンチョン・こもかい」ではないかと考えられることである。かつて藤木

久志氏は著書『日本歴史　15　織田・豊臣政権』（小学館発行）のなかで、肥前国平戸藩主松浦静山の『甲子夜話』に、豊臣秀吉による二度の朝鮮侵略（文禄・慶長の役）で、朝鮮半島南端の鎮海湾に面した熊川から陶工たちが日本へ強制連行され、彼らが平戸焼の村の氏神として「熊川明神」を祀りながら母国から隔離されて生きている、という記事のあることを紹介されているが、わたくしはこの「熊川明神」と「熊川治郎左衛門」・「熊川（若宮）社」が同じ肥前国ということで共通しているところから、これらが見えない糸でむしろ結びついているように思われてならない。

すなわち「熊川治郎左衛門」は、さきの陶工たちと同じように秀吉の朝鮮侵略の際に、日本に連行されてきた人物ではないだろうか。そう考えれば大野岳の治郎石・望郷石といわれる石で「治郎左衛門」が遥か故郷を偲んだという伝承も、その故郷を朝鮮半島の「熊川」とすることで説明がつきそうである。

では「熊川治郎左衛門」が朝鮮半島の熊川の出身であるとするならば、この熊川から肥前伊万里に連行されてくる必然性があったか、という疑問が生ずる。そこで、その点であるが、熊川には朝鮮侵略の際、日本軍の拠点の一つとして築城された熊川城がある。熊川城の築城は文禄の役の時であり、鎮海湾に続く小湾熊浦湾口の西側、海抜一八三メートルの南山に小西行長によって築かれたものという。その後、慶長の役の時には、熊川城の東北に位置する金海竹島城と、西北に位置する馬山城（昌原城）の両城が、鍋島直茂・勝茂父子に委任されており、その時熊川城を守備していたのは鍋島氏の部将とされている豊茂守であったという（『倭城Ⅰ―文禄・慶長の役における日本軍築城遺跡―』倭城址研究会発行）。

朝鮮侵略の際、鍋島氏を含む諸大名たちが陶工をはじめ多くの半島の人々を連行し、また来住が行われたことはこれ迄にいわれており、また佐賀市の唐人町や伊万里市の幸善町のおこりにも、半島の人々の来住が伝えられている。こうした連行・来住の人々は、陶工技術に限らずさまざまな職能を有していたと考えられ、そのなかに「熊川治郎左衛門」がいたのではなかったろうか。すなわち、「熊川治郎左衛門」は、おそらく土木治水技術を有していた人物で、水害に悩む水留の開発治水を指導し、開発田を水留の人々に齎した。それによって人々は「熊川治郎左衛門」に感謝し、その功績を称えることになったのではないだろうか。また大野山腹に残るという「治郎石」の伝承との関連はすでに指摘した通りであるが、なお若宮社と熊川社の合祀について、熊川社が「治郎左衛門」を祀ったのか、「熊川明神」と同じなのかという点については保留せざるをえない。

おわりに

「熊川治郎左衛門」の伝承について、独断と偏見により推測を重ねて考えてみた。そのさしあたっての結論を箇条書にすれば、つぎの通りである。

①「防人」の時代（古代・律令期）に「熊川治郎左衛門」なる人物の存在はまず考えられないし、中世においてもそのような武士を想定することはむずかしい。

②「熊川治郎左衛門」が水留の人々に田を寄進した行為は、近世初期における水留の開発と結びついていると考えられ、それは「治郎左衛門」による開発・治水の指導の結果、水留村が成立したことを意味しているのではないか。

③「熊川」とは、福生市の熊川ではなく、おそらく朝鮮半島の熊川であり、秀吉の朝鮮侵略に際し、鍋島氏により連行されてきた人々のなかに「治郎左衛門」がいたのではなかったか（「治郎左衛門」なる人物を肯定するとすれば、それは日本に居住して、「治郎左衛門」と呼ばれたのであろうか）。

④「熊川治郎左衛門」の伝承は、古代肥前国大野岳の烽火番に東国から防人が赴任したという伝承と、近世初期における水留の開発・治水および立村に関する伝承という二つの異った伝承が複合、絡みあって成立した伝承と考えることができるのではないか。

⑤したがって中世の福生の歴史的事象の一つとして理解することは、無理といわざるをえない。

⑥なお最後に付言すると熊川の地名的検討は、かつての『福生町誌』でも行われておらず、後考を待ちたいが、あるいは古代東国における朝鮮文化渡来の問題として理解しえるかどうか。

以上である。わたくし自身、前述したようにこうした伝承の理解ということについては、全くの専門外であり、したがってこうした安易な結論は批判を免れえず、また伝承を伝えてこられた方々への配慮も欠いているかも知れない。これらのことについては寛容を願う次第である。ともかく福生の中世史をまとめるにあたり、避けることのできなかった「熊川治郎左衛門」の伝承に関する調査の概要とさしあたっての結論を、調査をさせていただいた者の責任としてわたくしなりに掲示しておきたいと思う。

なお文末ながら本調査に際し、立川愛雄氏には種々の御指導を頂き、盛峰雄・熊川武勇・熊川重太郎・山崎氏には現地で御案内を頂き、小松寿治氏には同行頂いたことあらためて記し感謝する次第である。

（くぼた・まさき　市史編集専門委員・駒沢大学文学部講師）